

学齡を超過した外国人青少年に対する

キャリア教育の在り方

—大学生とのワークキャンプ「にじいろ☆キャンプ」実践報告

**Career education for foreign youths past school age
- Practices at “Nijiuro Camp” work camps with university students**

小島 祥美

Yoshimi KOJIMA

Abstract

There are now more than 2.5 million foreign residents living in Japan. As the laws will be revised in April 2019 to increase the number of foreign workers accepted to Japan, this number is expected to continue to increase. However, the government does not yet require compulsory school attendance for foreigners. Thus, some foreign children living in Japan do not attend school. Furthermore, the government has made no effort to determine the true extent of this issue. Foreign youths who did not attend school when they were school aged will not have completed compulsory education. The government has also made no effort to track this information.

Many foreign youths who have not completed compulsory education and are too old to attend school are unable to enter further education, as they are unqualified to enter high school. They are therefore forced to establish their own lives within society and face an uncertain future. In particular, the Tokai region is home to many foreign residents. However, there are no public evening schools. The only places where foreign youths can belong and learn are school classrooms run by non-profit organizations.

Here, work camps are conducted for foreign youths so they may gain confidence in their own identities and develop ambitions for the future. Groups providing support to foreign youths work with those providing support for university student volunteer activities to hold work camps for foreign youths. This is enabled through the aid of groups that provide mutual education in a natural environment. This paper reports on the practices at these work camps over a five-year period.

1. 前史・にじいろ☆キャンプのはじまり

本稿は、外国人青少年と大学生とのワークキャンプ（合宿型ボランティア）の5年間（年1回）をまとめた実践報告である。この活動は、大学生のボランティア活動とそのスキルアップ

を支援する日本財団学生ボランティアセンター（以下「Gakuvo」と略す）の前代表と、東海地域に暮らす外国人青少年が抱える課題解決に大学生の力を生かしたいと考えていた筆者との出会いからはじまった。そして、Gakuvo が筆者からの支援の申し出を受けてくださったことで、2015年10月27日のGakuvoと愛知淑徳大学コミュニティ・コラボレーションセンターとの協定調印式をもって、連携が正式に開始した。この連携によって生まれた活動が、「にじいろ☆キャンプ（以下「にじいろC」と略す）である。

にじいろCのプログラム設計において、日本全国のワークキャンプを主催して世界各地にボランティアを派遣するNPO法人NICE（日本国際ワークキャンプセンター、以下「NICE」と略す）との協働を進めてくださったのは、Gakuvoの前代表であった。それからは、調印式までの2014年秋から2015年春までの間、Gakuvoの前代表とNICEの前事務局長と筆者との3人で、具現化にむけた打ち合わせを幾度か行った。

NICEと筆者のゼミとは、にじいろCの以前から協働していた。2013年度から毎年夏に、筆者のゼミ生たちはNICEを通じて海外でのワークキャンプを行う間柄だ。2015年度の夏も、9月初めにメキシコでワークキャンプを行ったが、この時のゼミ生の同行コーディネーターがNICEの前事務局長であった。そのため、この時のワークキャンプでは、初めて行くにじいろCの運営を視野に入れた大学生の育成をめざすこともできた。加えて、このワークキャンプに筆者も後から参加することで、NICEの前事務局長とはにじいろCのプログラムについて、空き時間に十分な意見交換ができた。そして、そこでの議論が、にじいろCの構想の決め手となった。その構想をGakuvoの前代表に伝え、帰国後すぐに3者で協議を重ねることで、方向性がまとまった。9月下旬には、Gakuvoの前代表、NICEの前事務局長、初回のにじいろCの学生リーダーと筆者の4人で、岐阜県白川村を訪問した。そこで、共育を自然のなかで実践するトヨタ白川郷自然学校（以下、「自然学校」と略す）の担当者と趣旨を確認したり、自然学校が行うプログラムに実際に4人で参加したりすることで、キャンプ地を確定した。

なお、これまでの準備では便宜上「子どもキャンプ」という言葉を使用していたが、多文化な子どもが参加するキャンプであり、外国人の子どもたちも覚えやすい名称にしたい、という大学生の提案から、「にじいろ☆キャンプ」と名付けることにした。

2. 背景

2-1. 東海地域に暮らす外国人青少年が抱える課題

法務省によると、2018年6月末現在で日本に暮らす外国人数（在留外国人数）は2,637,251人で、過去最多を記録した。2019年4月より外国人労働者の受入拡大を図るための法律が改正されることで、ますます外国人住民数の増加は予想される。だが、国は未だ外国人を就学義務の対象としない。そのため、国内には学校に通っていない不就学の外国人の子どもが多数実在すると予想されるが、国はその実態さえも把握していない。このようななかで、外国人が多く暮らす自治体で構成する外国人集住都市会議での報告や全国各地で外国人の子どもを支援する

NPO からの報告、筆者の研究成果などによって、近年になって喫緊の課題として理解されるようになった（小島 2016）。例えば、共同通信社（2016年2月）や毎日新聞社（2019年1月）は独自に調査と取材を行い、全国での外国人の不就学者数の推計を広く報道¹⁾したことからも、その深刻さは明白である。

学齢期に不就学であった外国人は、学齢を超過すると義務教育未修了者となる。しかし、学齢期の就学実態や数について信頼できるデータがないため、義務教育未修了者の外国人数の実態はまったくわからない。つまり、社会から「見えない」存在であるのだ（小島 2011）。

2016年12月、義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律（教育機会確保法）が成立した。これは、義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等を総合的に推進することを定めた法律である。この法律の成立後、文部科学省は公立夜間中学の設置促進を始めた。だが、現在までに東海地域では公立夜間中学の開校に至っていない。2017年5月現在、8都府県（東京都、千葉県、神奈川県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、広島県）に31校のみ設置という現状からも、限られた地域に暮らす者だけがアクセスできる公的な学び舎であることがわかる。

公立夜間中学とは、「義務教育を修了していない人たちの真剣の真剣な教育要求の声に、善意の教師たちが応急的に学ぶ場を設けたことが始まりである。そして、その『善意』と『応急』の精神が、年齢・生活歴・学歴・学力・国籍・入学時期を問わず、実に多様な生徒を夜間中学に受け入れてきた」（松崎 1979:13）学び舎である。そのため現在は、戦後の混乱期に学齢期を迎えたために学校に通えなかった人、親の仕事や結婚などに合わせて来日したものの日本の学齢を経過していた人、昼間の中学校で不登校となって中学校を卒業しなかった人、不登校等のためにほとんど学校に通えないまま、学校の教育的配慮により中学校を卒業した人など、何らかの事情で学齢期に義務教育の機会を十分に得られなかった人の学び舎として、重要な役割を果たしている（小島 2019）。

こうした公立夜間中学が実在しない東海地域において、昼間の公立中学での受入れが期待される。なぜならば、国は学齢超過者の昼間の中学校入学を可能としているからだ。だが実際は、「原則として、市町村教育委員会は、学齢と超過した義務教育未修了者をその設置する公立小・中学校に受け入れる法的義務はない」（日本弁護士連合会 2006:5）ために、自治体では積極的な受入れはされていない。つまり、東海地域には、出身国でも日本でも義務教育未修了の、学齢を超過した外国人青少年に対して、公的な学び舎は存在しないといえよう。

こうした現状において、学び舎と居場所を求める外国人青少年をサポートしているのが、東海地域ではNPOなどのボランティア団体であるのだ。彼（女）らを応援しようと、東海地域で活動するボランティア団体は、年に一度の中学校卒業程度認定試験（以下、「中卒試験」と略す）や高校受験に向けた学習の支援を行っている。昼間の公立中学校の受け入れについて自治体ごとのちがいや公立夜間中学にアクセスできないという地域に置かれた義務教育未修了者の外国人青少年にとって、日本では義務教育課程を修了したという「証明」と、次へのステップのた

めの「パスポート」となる日本政府発行の認定書が取得できる中卒試験は、非常に重要である。そのため、ボランティア団体が非公開で開催する学習教室の存在も口コミで広がり、各所の学習希望者は年々増加している。しかしながら、外国人青少年自身に学習意欲があっても、日本語を母語としない彼（女）らにとって、日本語を習得しながら教科の理解までには時間がかかること、ボランティア団体が主催の教室に通う交通費の負担が高額になってしまうために経済的な理由で学習に専念することができないこと等の理由で、一度の中卒試験でパスできる者は極めて少ない。そのため、2～3年もの時間をかけて中卒試験に向けた受験勉強を行う外国人青少年も実在する。特に、この間に自分への自信や将来への希望を失ってしまう外国人青少年も多い。

そこで、こうした外国人青少年が、自らのアイデンティティに自信を持ち、今後の生活への意欲を高めることの一助に、大学生という若い力が貢献できるのではないかと考えた。本学の大学生の場合、東海地域で育った者が多いことから、日本語指導が必要な同級生に持つ者や外国人住民が多い地域で育った者も多い。そのため、彼（女）らには外国人青年の存在を肯定的に捉えた、同じ地域で育つ生活者としての「まなざし」がある。この「まなざし」から生まれる「発想力」を生かすことで、地域が抱える課題解決に大きく貢献できるのではないかと考え、にじいろCの着想に至った。

2-2. 大学教育としての位置づけ

本学が所在する愛知県における外国人住民数は、都道府県別に比較すると、東京都に次いで第2位という地域である（法務省在留外国人統計、2018年6月末現在）。そのため、愛知県では全国に先駆けて、国内の外国人住民を担当する専門部署としての多文化共生推進室が設置された。それは、多文化共生施策の推進は行政施策としても重要視されている証ともいえるだろう。とりわけ、愛知県は公立学校における日本語指導が必要な児童生徒数が全国で最も多いという地域である。この調査は1991年から文部科学省が行っているが、この調査が開始した早い時期から、愛知県は第一位を独走し、第二位の神奈川県とその数も大きく異なるという状況が続く。つまり、ファミリー世帯で暮らす外国人住民が多いのが、愛知県の特徴である。

このような地域で小学校教員をめざす大学生が、筆者の主たるゼミ生だ。よって、学校教員をめざす大学生にとって、外国人児童生徒が抱える問題の理解は必須とされる。2017年度に筆者は所属学部を異動した。アドミッション・ポリシーとして学生に期待することを、現代社会で起こるさまざまな事象を多方面からとらえ、かつ社会の発展に寄与するために実践力・行動力を持つ人材へと成長することを目指す人々の入学を期待する大学生が、異動後の主たるゼミ生となった。中高の教員をめざす大学生もいる。

近年は、大学教育に求められる教育の在り方が大きく変わっている。そこには、学校の教育課程の基準として定められた学習指導要領の変化も大きく影響する。2020年度からの新学習指導要領によって、国は知識の理解の質を高め資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」²⁾

を学校現場に導入しようとしている。およそ 10 年ごとに改定する学習指導要領であるが、新学習指導要領で注目されるのは、「主体的・対話的で深い学び」の実施による授業改善がある。この「主体的・対話的で深い学び」とは、「過去の学習指導要領の中には、学習量の削減を主な内容とする『ゆとり教育』を求めたものがあつたが、その後の『脱ゆとり教育』の議論の中で、『詰め込み教育』に代わる教育方法」（出見世 2018:3）である。そのため、この主体的な学びは、大学教育でも思考力・判断力・表現力を前提とした質の高い教育が期待されているといえよう。それは、高大接続改革によって従来の暗記を中心とした大学入試センター試験に代わり、自らの考えを記述する問題が導入された大学入学共通テストが 2020 年度（2021 年 1 月）から開始することになったことから、推察できる。

以上から、地域が抱える問題解決をテーマに、その解決策を多様な組織・団体と協働しながら模索するにじいろ C の実施は、大学生の「主体的・対話的で深い学び」に即した、理論と実践の融合と位置づけることができる。

3. にじいろ C の実践

3-1. 大学生を対象にした事前学習

学生スタッフとして参加した大学生は、筆者のゼミ生を中心とした愛知淑徳大学の学生であった。そのため、年度初めの 4 月から 11 月までのゼミ（演習）の講義時間を事前学習として位置づけ、外国人青少年の背景理解を進めた。なお、筆者の学部間の異動に伴い、1 年目（2014 年度）から 4 年目（2017 年度）に参加した学生は文学部教育学科 3 年生、5 年目（2018 年度）に参加した学生は交流文化学部 3 年生であった。これまでの具体的な内容を表 1 に示す。

表 1 事前学習の主な内容

時期	項目
4～7 月	<ul style="list-style-type: none"> ・チームビルディング ・東海地域に暮らす外国人住民の特徴と外国人の教育問題、各自が暮らす自治体における外国人を対象にした行政施策と教育施策の特徴、外国人住民を支える地域のボランティアの活躍の理解をめざした視聴覚教材を活用した講義とワークショップ（参加型授業）の実施 ・各学生が暮らす地域については、自治体や NPO などへ学生自らで訪問し、フィールドワークをした内容をまとめて発表する場の設定 ・海外ワークキャンプでの開催地が確定した後、開催地及びその国の現状と抱える課題、日本の援助の現状などについての学習を開始（開催地及びその国にかかわる NGO や活動者などを招いたり、JICA 中部を訪問したりなども同時に実施） ・これまでの学習を踏まえ、各自での理解を深めていくために課題図書を設定し、大学生として社会に貢献できることの各自の意見まとめ、発表会の実施 ・松阪市教育委員会と協働した、外国人児童生徒が写真で自分を語るワークショップ「フォトストーリー」の準備
8 月	<ul style="list-style-type: none"> ・松阪市教育委員会と協働した、外国人児童生徒が写真で自分を語るワークショップ「フォトストーリー」を実施（2 日間）

	<ul style="list-style-type: none"> ・その他、各自が興味関心を持つ地域でのボランティア活動に参加 ・国際ワークキャンプのオリエンテーション、準備
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・海外ワークキャンプの実施 (14年度メキシコ、15年度フィンランド、16年度ネパール、18年度スリランカ)
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・海外ワークショップの振り返り(中日新聞の「発言」へ投稿) ・グローバルゼーションと多文化共生をテーマにしたディスカッション

3-2. 協働団体との事前準備

まず4月に、外国人青少年を支援する団体の選定をGakuvoとNICEの筆者の3者で行うことから着手した。5月に入り、参加いただきたい団体への説明を筆者が直接行いながら、その団体の抱える課題やにじいろCに期待することなどのヒアリングを実施した。これらの結果を踏まえたプログラムの再考の準備をして、6月にキャンプ地で、Gakuvo、NICE、選定した団体、自然学校、学生スタッフのリーダー、筆者との協議の場を設定した。その場では現地視察を再度行ったうえでプログラムの再考を行い、当日までの各団体の役割を確認した。以後は、必要に応じてメールや電話等で意見交換をしながら、当日を迎えた。

9月末までに、外国人青少年への説明と募集用の案内文づくりはNICEを中心に準備した。10月末までには、参加が決まった外国人青少年に配布する「旅のしおり」を大学生スタッフが手作りで準備した。参加が確定した外国人青少年について、アレルギーなどの配慮すべき事項は適宜確認し、関係者間で情報を共有した。

なお、参加いただいた外国人青少年を支援する団体は、1年目(2014年度)はNPO法人シェイクハンズ(愛知県犬山市)、2~3年目(2015~16年度)はNPO法人可児市国際交流協会(岐阜県可児市、以下「可児協会」と略す)、4~5年目(2017~18年度)はNPO法人トルシーダ(愛知県豊田市、以下「トルシーダ」と略す)であった。これらの団体には、参加する外国人青少年とその保護者への説明と募集を担当していただいた。

3-3. 前日の学習

前日の学習として、GakuvoとNICEの各担当者、外国人青少年を支援する団体の関係者、参加する学生スタッフ全員と筆者が一同に集まり、事前学習を行った。具体的なプログラム内容は、5年目にあたる2018年11月16日の18時から22時に行ったものを表2に、最終の確認事項を表3に示す。

なお、前日の学習を行った施設は、1年目は犬山市市民活動支援センター(愛知県犬山市)、2~3年目はささゆりグリーンパーク内のわくわく体験館(岐阜県可児市)、4~5年目は愛知淑徳大学・長久手キャンパス内の国際交流会館(愛知県長久手市)であった。事前学習後は、同施設に全員で宿泊した。

表2 前日の学習・プログラムの主な内容

1. 自己紹介、2. 期待すること／不安なこと の共有、3. スケジュールの確認、スタッフ&先輩外国人青少年の役割、4. 外国人青少年たちへの理解、5. 各班の外国人青少年たちの配慮点確認
学生スタッフによるプログラムリハーサル



NPO 法人トルシーダの伊東氏と湯原氏からアドバイス



大学生スタッフによるプログラムリハーサル

表3 にじいろC開催にかかわる最終の確認事項

項目	ポイント事項
Goal of the Camp	<ul style="list-style-type: none"> ・外国人青少年たちが進路（進学やキャリア）について考える機会の提供 ・外国人青少年と大学生ボランティアのつながりづくり ・自己やアイデンティティへの自信を持ち、今後の活動への意欲が高まるきっかけづくり
How We Achieve the Goal	<ol style="list-style-type: none"> 1. 楽しい時間をすごそう 2. 体験することで学ぼう 3. グループで活動することから学ぼう
Responsibility Code	<ol style="list-style-type: none"> 1. 体調の観察 2. 体調不良者の対応 3. 常に人数の把握をすること 4. インストラクターの指示に従うこと 5. 外国人青少年たちと必ず一緒にいること、ひとりにしないこと
A few tips	<ol style="list-style-type: none"> 1. Teens first. 2. 体験することで学ぼう 3. ニックネームで呼ぼう 4. 笑顔を忘れずに 5. 外国人青少年たちを見よう！→背景や事前情報よりも今を大切に。

3-4. 当日プログラム

5年目にあたる2018年11月17日から18日の2日間に行ったプログラムを、以下に示す。なお、この年の参加者は、外国人青少年は21人（ブラジル、ボリビア、中国、ネパール、ベトナム、フィリピン出身の13～20歳）、大学生は18人であった。

<1日目>

08:40 はじまりの会（アイスブレイク、自己紹介など）

09:20 白川郷へ出発

12:45 白川郷到着・昼食（合掌造りの店内）

13:45 自然学校のインタープリターの方々と合流し、世界遺産・白川郷合掌造り集落内を巡りながら、グ

ループで協力して答えを見つける「フォトウォーク」にチャレンジ！

(1年目は合掌造り集落内をチェキをもった探検プログラム、2年目以降は同プログラムで実施した)



- 16:00 トヨタ白川郷自然学校へ移動
- 16:30 夕食前プログラム (フォトウォークの答え合わせ、夕食マナーレクチャー)
- 17:30 夕食 (フレンチのコース料理)
- 19:00 野外で焚き火を囲んで語り合う (1~3年目はナイトハイク、4年目は屋根付き焚き火)
- 21:00 入浴 (温泉・大浴場に入る)
- 21:45 学生スタッフと外国人青少年とのグループミーティング
- 22:30 全体ミーティング
- 23:00 就寝

<2日目>

- 06:00 起床
- 07:00 朝食
- 08:30 キャリアプログラム「世界遺産を支えるお仕事」(4コースから1つ選択)
(1年目は初日の探検プログラムの振り返りと野外でのピザづくりを実施した。dについては、2年目は地域おこし協力隊、3年目は川魚料理人、4年目は商店・店主であった)



a インタープリター
(自然を案内する仕事を学ぶ)



b.合掌屋根葺き替え職人
(伝統技術を引き継ぐ職人の仕事を知る)

- c.ホテルスタッフ (ホテル全般に関する様々な業務を知る)
- d.ゲストハウスオーナー (国内外のゲストを受入れる仕事や経営者の視点を知る)

- 11:00 各班でお互いが体験した仕事について共有し、気付いたことや学んだことを全体で発表
- 12:00 昼食
- 13:00 自然学校出発

16:00 豊田市・到着、振り返り会



17:00 外国人青少年 解散

17:30 学生スタッフ振り返り、スタッフ解散（18:00）

3-5. 大学生を対象にした事後学習

12月のゼミ（演習）の講義時間を事後学習として位置づけ、振り返りを行った。ここでは、各自が設定した目標に対して実現できたこと、できなかったこと、今後の課題などを丁寧に話し合った。それらをもとに、地域社会に発信したい自分の考えをまとめ、中日新聞の発言欄³⁾への投稿原稿づくりを行った。

加えて、海外ワークキャンプから伴走いただいた NICE スタッフを迎え、大学生と筆者の3者による個人面談を一人ひとりに行い、各自の成長と今後の課題を話し合う時間を設けた。

その他、11月～1月は大学生（学生スタッフ）が主体となり、学生からのメッセージを添えた「にじいろC思い出ノート」の制作づくりも行った。これは、参加した外国人青少年たちをはじめ、協力いただいた関係者や各種の活動報告会などでも配布した。

また、大学生たちは年度終わりに Gakuvo 主催のボランティアシンポジウム（東京）に参加し、他大学の学生に活動報告しながら、活動の意義を考える機会を毎年いただいた。



1年目・思い出ノート



2年目・思い出ノート



3年目・思い出ノート



4年目・思い出ノート



5年目・思い出ノート

4. 外国人青少年たちの声

〇2年目に参加した外国人青少年から：

・みなさんと一緒にいた時間は、私は日本へきて一番楽しい時間でした。本当にみなさんと友達になりたいのですが、日本語がまだしゃべれないため、言いたいことが言えなくてくやしくてしょうがない気持ちでいっぱいでした。これから私は必ず一生けん命に日本語を勉強して、できるだけ早く学校の授業についていけるように勉強します。それで、その時又みなさんとたくさん会話することを楽しみにしています。

・ぼくはもう、ゲームであそぶようなこどもではないので、このキャンプはつまらないものとおもっていました。でも、わたしのかんがえはまちがっていて、キャンプはアクティビィとわらいでいっぱいでした。

・一番の問題はお風呂です。シャワーと温泉はどちらかな選びます。でもジュンジは温泉のほうがいいといいました。なぜなら、温泉は体が温まるし、疲れが取れます。温泉に入る前にみんなは服をぬいで、みんなはさいしょはとでもはずかしがりました。人前ではだかになったことがないからです。でも時間がたつとはずかしくなくなりました。みんなで話していると、はだかであることを忘れませんでした。みんなはいろいろな話しです。

・たった2日でした。わたしたちは、ながいあいだおたがいをしているようにかんじました。わたしはキャンプにきたいしていてみなさんは、わたしがきたいしてたいじょうのことをしてくれました。もう、みなさんにあいたいです。またね。さよならは終わりではありません。

〇4～5年目の2年続けて参加した外国人青少年（先輩ティーン）から：

・いろんなことを教えてもらって、くまさんの話を聞いたときさ、俺の人生、俺は何がしたいかなと思いました。俺はいろんなことがしたいんだから、もう時間がないので、あまり時間がないので、もう（高校）1年に経ったんだから、考えなきゃと思いました。だからこれから、あのこれからのいろんな経験をやってみたいと思って、自分の一番したい事を見つけて、楽しく人生を生きたいと思います。

・にじいろCで頑張ったことは、みんなの前でいっぱい話したこと。恥ずかしかったけど、少し自信がついた。できてよかったことは、大学生たちと夢の話ができたことです。高校を卒業するのが、私の夢です。最後まで諦めない。

6. コラボする皆さんの声

6-1. 外国人青少年を支援する団体のスタッフから

Q1. 日常生活で抱える課題を教えてください。

○トルシーダスタッフ：

トルシーダでは、主に日本の公立学校へ行っていない子ども・若者の支援をしています。また、にじいろCには、進路を考え始める中学生にも参加を呼び掛けています。彼らに共通していえるのは、社会（日本人）との接点がないこと、情報が届いていないこと、将来の見通しが持てないこと等です。教室の参加者の中には来日してから1年近くも家から出ずに、ゲームをしていたという若者もいましたが、日本語教室の活動だけでは、目標や、具体的な夢を考える機会がないという課題があります。

にじいろCのお話をいただいたとき、白川郷も自然学校も魅力的に感じました。さらに、年齢の近い大学生が身近なロールモデルになってくれるのでは、という期待も抱きました。

○可児協会スタッフ：

当協会の、学齢超過の子どもの高校進学支援教室には、本人の意思で来る子ばかりではなく、1年間勉強のモチベーションが維持できず来なくなってしまう子もいました。日本語学習や入試のための教科学習が、先の見えない閉塞感となり、家族の支えなしでは継続は難しいです。10代後半では、将来の夢も漠然としており職業選択についても先が見通せず、結局、親と同じように派遣会社から工場としか考えることができないため、学ぶモチベーションも持ちにくい。また、思春期での来日で、うまく親子関係が築けずホームシックや不眠症になったり、妊娠出産で進学をあきらめるケースもありました。

母国では、なりたい夢には近づけそうでも、日本に来て言葉の壁にぶつかって、自らの進路を見いだせない若者。夢を持っている若者でも、パイロットや医者など、日本人にとっても大きな夢が多いです。どんな職業があるのか、仕事ではないにしても、どんな道があって、日本ではどう進めばよくて、どんな将来を進むことができそうなのかが分からない。日々の生活の中でさえ、多少の不安を抱いている中で、自分と向き合い考える時間や機会を持つことは、サポートできる人がいて、作ってあげないとできないのではないかと思います。そして、子どもの時から親と離れて過ごしている若者も多いので、様々なことを体験して、感じて、考えるという、経験が少ないということも課題なのではないかと感じています。

Q2. にじいろCに参加することで生まれる、子どもたちのハッピーとは？

○トルシーダスタッフ：

にじいろCの日、子どもたちは、バスの中でも、途中休憩でも、白川郷でのフォトウォークでも真摯に自分に向き合ってくれる大学生の気持ちを感じ、生き生きと動き始めました。「受け入れてもらっている」

感覚を持つことは、学校へ通っている子どもにも学齢超過の若者にも貴重な経験です。大学生をニックネームで呼び、語り合う姿は、私たち指導者までも幸せにさせました。

特に2018年度は2回目ということもあり、1回目以上に大学生にお任せしようという立場で指導者が参加したのが功を奏したのか、たくさんの嬉しいことがありました。具体的なことをスタッフ間で共有したお礼メールから抜粋します。

授業後の掃除では「協力、協力」といって素早く掃除を終わらせびっくり。(最後の振り返りで)「おきれない」と約束したJ君は4月以来初めて一週間無遅刻無欠席を実現、(いつも余計なひと言のために)クラスで少々浮き気味だったC君はすっかりみなと仲良し口が重かったR君が「なんだかしゃべりはじめた」と担当の先生を驚かせ・・・とにかく毎日みな楽しそうで「とても前向き」です。

これまでも大学生ボランティアの方との関わりはありましたが、「愛知淑徳大学の大学生はとてもわかりやすい日本語で話してくれた」と話す子が多かったです。きっとそれは言葉だけの問題ではなくて、ゼミ生のみなさんが子どもたちに寄り添って、伝えよう、理解しようとしてくれたその気持ちが子どもたちによく伝わったのだと思います。(「ぼくは恋をした」とノートの隅っこに書いた子もいました。誰かは・・・内緒にしておきますね)

また、「来年は先輩として後輩を助けたい」と話す子も多かったです。非常に身近な存在として二人の先輩が一緒に行ってくれたことも子どもたちの心に少し先のことを考える道を作ってくれたようです。その道を歩くための体に一本骨が入ったようでもあります。

○可児協会スタッフ：

クラスメートとのバス旅行という非日常の経験がまず、わくわくするもので、岐阜県にある世界遺産の白川郷に行けることがわくわくを倍増させています。慣れない大浴場での入浴や、ホテルのディナーでテーブルマナーを学び、朝食のバイキングも楽しそうでした。グループ活動では、連帯感や責任感が養われ、学習教室に通う子どもたち全員で時間を共有したことで、貴重な思い出を作ることができました。

“挑戦してみる“ことで、子どもが少しずつ自信を持っていったように思います。”挑戦“は、日本語で話すことはもちろん、恥ずかしいけど温泉に入ってみよう、野菜を食べてみよう、手伝おう、これをやってみようなど、それぞれがそれぞれの小さな場面で挑戦をしていました。そして、学習教室に通う子どもたち全体の結束も強くなりました。お互いの新しい一面を知ったり、共有できる思い出があることは、彼らの今後のモチベーションにもつながり、高校受験までつながったと思います。普段は自分や家族のことに精一杯だと思うのですが、一緒に活動し、その挑戦を支えてくれる人・環境があることで、子ども自身も周りを見て行動できるようになっていったと思います。

Q3. にじいろCから感じた、大学生が持つ力とは？

○トルシーダスタッフ：

にじいろCを通しての変化はこのようにすぐに具体的形になって現れるものばかりではありません。参加した子どもたちは大学生の友だちが出来たと感じ、そのことでプライドを得て自信につながっていきます。

中卒で進学はしないと決めていた子が、「定時制へいこうかな・・・」と言い出したときには、大学生の力を実感しました。

温かく豊かな環境の中で、一人ひとりの心に「にじいろキャンプの種」がまかれ、確実に成長していることを感じています。

○可児協会スタッフ：

小島ゼミ自体の歴史もあり、年々大学生に頼もしさを感じます。大学生だからできる寄り添い方や声掛けをしていました。この活動が、大学生や外国ルーツの青少年のアクティブラーニングなので、体験を通して成長することを大学生が見せてくれます。外国から来た子たちは、グループで活動することに慣れておらず、それをファシリテートしてくれる大学生に信頼を持って接するようになります。それは、最後の振り返りの時間の高揚と一体感や感傷がない交ぜになった雰囲気が物語っています。

勢い、雰囲気作り、子どもたちへの心配り・気配りの細かさ。多くの子どもたちは、教室に通っている間、同年代の日本人と関わる機会は少ないです。そんな中で、ほとんどが初めて会ったばかりにもかかわらず、2日間で生まれる一体感や、結束力には驚きました。大学生のみなさんより、長く関わっているはずの私たち指導者もうらやましいと思うほどで、「大学生の力はすごいな」と感じたことを強く覚えています。

大学生のみなさんの、子どもたちへの関わり方や心配り、気配りからなる雰囲気が子どもたちに伝わり、かけがえのない思い出になったのだと思います。

6-2. ワークキャンプを専門とする団体のスタッフから

Q1. NICE からみた、本活動の特徴とは？

本活動では、外国にルーツをもつ子ども達がいくつもの初めての経験にチャレンジし、その子ども達を大学生がじっくり寄り添い応援します。さらに大学生が様々な大人たちから見守られながらプログラム運営にチャレンジをする、3重構造となっています。それゆえに、子どもと学生が、どちらも安心してチャレンジできる環境であることが大きな特徴と言えます。1泊2日寝食を共にする中で、言葉・文化・年齢等を越えて自然に生まれる友好関係や信頼関係が追い風となり、この環境を作っています。

もう1つの特徴として、仕事体験だけでなく本質的にキャリア・進路を考えるきっかけとなるプログラムであるという点が挙げられます。本活動の目玉であるキャリアプログラムでは、子どもたちは講師から仕事内容を聞き体験するだけでなく、今の仕事に就いた経緯や想い、仕事をする上で大切にしていること、講師の人生ストーリーに触れます。言葉・文化の壁や進路への不安を持ちながら暮らす子どもにとって、「自分は人生でどんなことがしたいのか。そのためにどんな進路を目指したいのか。」と、自分自身と向き合う機会になります。

Q2. 大学生の成長（学びを深める）をも視野に入れた本プログラム設計において、最も大切にしていることは？

第1に大切にしていることは、学生同士が信じ頼り合える「チームづくり」です。本活動前の夏休みに、学生たちはゼミの一環として海外でのワークキャンプを経験します。慣れない海外の地で自分たちがマイノリティーであるという立場を経験し、助け合いながら寝食を共にし、地域のために汗を流します。そこで得たチームワークは、渡航前の関係性とは比べ物にならないほど強く深みがあります。そのチームワークで、本活動に向け一人ひとりが本気で意見を出し合い、支え合いながらプログラムを作り上げていく過程が大きな学びに繋がります。

その中で、NICE がコーディネーターとして、学生が自分自身で答えを見つけ出せる工夫をすることや、適切なタイミングで丁寧なフィードバックをできるよう心掛けています。

Q3. 大学生に求められる力とは何か？

人の可能性を引き出すエンパワメントの視点を持つことだと考えます。学生達が関わる子ども達は多様な背景を持ち、日常生活や進路に困難を抱えています。彼らの頼れるお兄さん・お姉さんとして、子どもたちが少しでも前向きにチャレンジできる環境を作っていく中で、子ども達一人ひとりの良いところを見つけ、「サポートしすぎずに応援する」ことが求められます。サポートにエンパワメントの視点が入ることによってサポートする側もされる側も難易度が上がりますが、双方にとってその後の人生に役立つ重要な経験となります。

にいじろC最終日の振り返りで、ある中学生参加者が「いろいろむずかしかった。でもほんとうにたのしかった。」と、疲労と充実感の混ざった表情で伝えてくれた言葉がエンパワメントの大切さを再認識させてくれました。

6-3. 大学生ボランティアを支援する団体のスタッフから

Q1. Gakuvo からみた、本活動の特徴とは？

文部科学省が二年に一度行っている「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査(平成 28 年度)」によると、日本語指導を必要とするは 43,947 人(外国籍・日本籍を含む)、そのうち 9,275 人が愛知県の学校に通っており、全国の都道府県の中でも断トツの数となっている。

外国にルーツを持つ児童生徒には、日本語指導だけでなく、成育環境や家庭環境なども把握した、個別の指導計画をつくる能力も求められている。こうした背景を踏まえ、教職課程を学ぶ学生が、近い将来に直面するであろう課題に、現実的に立ち向かう機会を提供している、「教室外での学び」であることが特徴といえるのではないかと。

Q2. Gakuvo からみた今後の課題や展望とは？

前述した調査によると、日本語指導を必要とする児童生徒数はわずかな増減はあれど、調査を行った平成 28 年度(2016 年度)には過去最多の記録となっており、今後さらに増加することが予想される。こうしたことから、愛知県と同様の課題に直面する地域が全国的にも増えてくるが併せて予想される。にじいろキャンプを愛知での事例として、愛知淑徳大学とも協力しながら他地域でも展開できるような仕組みを

今後構築していきたい。

Q3. Gakuvo による本活動に対する評価について

事業評価報告書（2012～2016 年度の自主事業「学生ボランティア活動への支援等」計 6 事業を対象に行った事業評価報告書（2018 年 2 月 28 日発行分、22-23 頁）である。報告書は、村上徹也氏（日本福祉大学教授／市民社会コンサルタント）によって分析された、第三者による評価）には、Gakuvo が協力関係を結ぶ大学と行っている数々な取り組みに関する評価が記述されている。そのなかで本活動については、連携の利点として、マルチステークホルダー型プロジェクトを可能にする Gakuvo による経費負担、外国人青少年のエンパワメントの 2 点が高く評価されている。また、連携の課題として、Gakuvo スタッフによる取り組みへの寄り添い継続、学内の環境整備の 2 点が挙げられている。

加えて、連携の特徴については、学生の準備学習、国際ワークキャンプ団体との協働の 2 点が評価され、次のように分析されている。

○学生の準備学習

学生たちは前期のゼミで対象となる外国人青少年について理解を深め、夏休み前には各自が関心を持つ分野の地域活動に取り組み地域課題への関心を深め、夏休み前には 2 週間の海外ワークキャンプを行って言葉が通じない相手とのコミュニケーション力を養うなど、非常に充実した事前学習を行ってキャンプに臨んでいる。

○国際ワークキャンプ団体との協働

キャンプの企画、運営には、NPO 法人 NICE のスタッフが加わって、プログラムの硬化性を高めている。さらに、学生たちは NICE を通じて夏休みの海外ワークキャンプに参加していて、その際にもにじいろ☆キャンプの運営に関わる NICE スタッフから指導を受けることにより、プログラムの運営に必要なスキルを高めることができている。

6-4. プログラム運営を専門にする団体のスタッフから

Q1. 自然学校からみた、本プログラムの特徴とは？

5 つの異なる組織が大学生や子どもたちの成長の場を創るという共通の目的のために、各々の組織の特徴を活かして、協力して 1 つのプログラムを創り上げていることが 1 番の特徴だと思います。当校で行うプログラムの中では珍しいケースの 1 つです。

また、1 泊 2 日という限られた期間の中で、外国人の子どもたちの表情が大きく変わっているのも特徴の 1 つと言えると思います。試行錯誤しながら関わっていく大学生やそれを支える大人達の真剣に向き合う人の数が影響しているのではないかと思います。

そしてその中で目的がそれぞれ 2 つあることも特徴と言えると思います。教員を目指す大学生にとって将来きっと自分のクラスにもいるだろう海外にルーツを持つ子どもへの関わり方を学ぶ機会であり、外国人の子どもたちにとっては仲間との交流を深める場や自分の将来を考えるきっかけの場だということです。

Q2. 本プログラム準備において、最も大切にしていることとは？またその難しさとは？

大学生と外国人の子どものコミュニケーションの場をいかに多く創出するかという点を最も大切に考え準備しています。例えば、世界遺産合掌集落フォトウォークでは課題解決を通して大学生と子どもが自然とコミュニケーションを取れるように配慮しています。

一方、この大学生と子どものコミュニケーションの場の創出を目指すことが逆に難しさでもあります。実際に、キャリアプログラムの講師紹介の場面では私達自然学校のスタッフが紹介したほうがより分かりやすく紹介できるのではないかという声スタッフが上がったこともあります。しかし、それではどう伝えるか試行錯誤する大学生のアクションの場を奪ってしまうことになってしまいます。その子どもにとっての分かりやすさと大学生にとっての学びの場のバランスをとることが大切にしていることでもあり、難しさでもあります。

Q3. 今後の課題や展望とは？

今後も引き続き、より多くの外国人の子どもにこのような体験ができる機会が広がれば良いと思います。大学生という身近な目標とキャリアプログラムに関わる大人という少し遠い目標を見るのが刺激となり自分の人生について将来について考えるきっかけとなればと思います。

また、大学生にとっては試行錯誤しながらアクションしているうちにあっという間に2日間は終わってしまうことかと思えます。あの時こうすれば、もっと違うアプローチがあったかもしれないときと思うこともあるかと思えます。そのため、例えば当校のスタッフの目線からフィードバックをする場を作ってみることや、内容のブラッシュアップをして同一の年内に2回目の開催をし、経験と反省を活かす場ができれば、より学びにつながる場になるのではと思います。

6-5. 本実践の総括

5年間にわたる本実践の総括を上田英司氏（認定NPO法人日本NPOセンター事務局次長）にお願いした。上田氏はNICEの前事務局長として、本プログラム設計から尽力いただいた一人である。現在は離れた立場から、全国の動向を踏まえて分析いただいた。

〇はじめに

「また会おうね」「本当に楽しかった」にじいろCの最後で、参加した子どもたちと大学生たちで交わされる言葉です。そのときに涙を流すのは、子どもたちよりも大学生、いや、むしろその光景をみている大人たちのほうかもしれません。

白川郷での1泊2日。ガイドといっしょに巡る白川郷探索、レストランでのフレンチ、友達同士と過ごす宿泊体験、白川郷で営まれている仕事の体験。子どもたちは、バラエティ豊かなプログラムを大学生と一緒に経験します。キャンプを通じて、子どもたちに、大学生や地域の大人たちとの交流によって、将来のロールモデルをふやしてほしいという期待があります。また、大学生には、外国にルーツを持つ子どもたちの“くらし”と接することにより、彼らの持つ“可能性”や“くらしの困難さ”に気づくこと、また、

授業やゼミで学んできたことを実践する場とすることをねらいとしています。

○プログラムの特徴 ～5つの組織による連携事業と学齢超過の外国人青少年～

キャンプは、5つの組織が連携して行われています。愛知淑徳大学と資金提供を行う Gakuvo、子どもキャンプや若者育成のプログラムコーディネーションの実績がある NICE が事業全体の事務局を担当。加えて、子どもたちの学習支援を行っている地域 NPO と、体験プログラムを提供できる自然学校が、協働運営する形をとっています。

5つの組織がそれぞれの強みを活かし、子どもたちと大学生に、教育の機会がつけられていることが、大きな特徴のひとつです。組織を越えて課題解決に取り組むことの重要性が様々なところで提起されている一方で、実際に有機的な連携をつくっていくことは容易ではありません。キャンプでは、各組織が共通の目標に向かって活動を計画、実行、さらには毎回振り返りを行い、活動の改善を行う PDCA のサイクルができていくことは、全国的な協働モデルとなる事業だと思います。

また、学齢超過の外国人青少年を対象とした活動であることも特徴のひとつです。統計的調査が行われずニーズが見えにくい存在は、行政の施策から対象として漏れてしまいがちです。そのなかで、民間資金を得て、自らのノウハウを活かし、外国人青少年にプログラムが展開されていることは、とても重要なアクションです。私たち民間の取り組みは、活動を通じて先駆けて社会に課題提起をしていくことも大切な視点です。この活動は、学齢超過の外国人青少年の“可能性”や“くらしの困難さ”を社会提起する意味でも、とても価値あるものです。

○プログラム設計において、今後も大切にしていけるべきこと

国内の在住外国人数は今後も増加していくことは明らかです。それに伴って、外国にルーツを持つ子どもたちも増え、いかに学校や地域のなかで、インクルージョンされたコミュニティがつけられるかがとても重要です。そのコミュニティづくりに、キャンプの持つ意義や可能性はますます高まっていくこととなるでしょう。

今後も大切にしていけるべきことは、子どもたちの“くらし”を軸に考えることだと思います。子どもたちと1泊2日の生活をする中で、教室のなかだけではみることができない彼らの可能性に気づく場面がたくさんあります。逆に「みんなで一緒に温泉に入る」ということがどれだけ戸惑いがあるのかを知り、“くらしの困難さ”も体感します。学校生活のなかで、仮に問題行動として取り扱われてしまうような事例についても、「なぜ、彼らはそうがながえるのだろうか？」という背景に視点を置くことで、その解決方法はまったく違ったアプローチになることと思います。その視点を変えてみるというトレーニングを、キャンプで引き続き培ってほしいと思います。

○大学生に求められる力

国連が掲げる SDGs の前文のなかで、「誰ひとり取り残さない」という言葉があり、4条には「最も遠くに置かれた人たちに最初に手を伸ばす努力する」ということが書かれています。その実現には、変化する

ことを恐れずに、新しいチャレンジに挑戦していくことが大切だと考えます。学生時代には、ぜひ多くのチャレンジをして、成功体験や失敗体験を積んでほしいと思います。

キャンプで学生が主体となって「旅のしおり」を手書きでつくる機会があります。授業で学んできたことを発揮する場面ですが、毎回、1回で完成することはありません。子どもたちの“くらし”を想像しながら、イラストや表現方法、情報量などを精査しなければなりません。そのしおりづくりが、まさに成功体験と失敗体験の場であり、誰ひとり取り残さないようにするためにつながっていきます。大学生には、自身が見てきたものと学校で学んでいることを融合させて、失敗に臆せず、チャレンジしていく姿勢を身につけてほしいと思います。

今後も、キャンプが子どもたちや大学生にとって、有意義な学びの場として成長していくことを期待しています。

7. さいごに

「外国人青少年たちの声」「コラボする皆さんの声」から、学齢を超過した外国人青少年に対するキャリア教育の在り方として、大学生とのワークキャンプの有用性が高いことは、明らかである。

だが、単に「大学生とのワークキャンプを実施すればいい」というわけでない。大学生とのワークキャンプでは、連携する組織・団体はさる事ながら、その担当者のパーソナリティが非常に重要であることを、本実践を通じて学んだ。なぜならば、大人の本気度で大学生の言動が著しく変化するからだ。他者から認められ、受け入れられたという経験がない者には、他者を中心から受け入れることはできない。そして、外国人青少年が抱える問題を本気で解決したいという「熱量」が大学生に届かなければ、大学生が会う外国人青少年との向き合い方にも影響する。

確かに、事前学習では外国人青少年が抱える課題を「頭」で理解することは必須である。しかし、それだけでは大学生に「熱量」は届かない。そこには、「イマドキの若者」が抱える問題もある。例えば、中学生や高校生の時期に進学にかかわる「内申書」に縛られて、教員や大人の顔色をうかがいながら、「模範解答」を答えることが習慣化してしまったことから起因する言動もその一つようだ。そのため、自身の意見や考えを声に出すことに戸惑い、それを拒む大学生も少なくない。そして、SNS などの影響もあってか、対面で人と話すことを苦手にする大学生も多い。加えて、少子化によってかつてより「大学生になること」が安易になった今日、「周囲が進学するから」という理由だけで進学し、そのまま目標を持ってずに大学生活を過ごす学生も珍しくない。だから、このような大学生に筆者自身が取り組む研究課題を熱く語ると、初めは醒めた目で見られる。「なぜ外国人のためにそんなに一生懸命になれるのか」「先が見えない挑戦は怖くないのか」と質問されることもしばしばだ。しかし、研究者として社会と真剣に向かい合う真の姿を大学生に伝え続けることで、大学生は自らで考え出し、自分にも何ができるのではないかと、を自問自答しながら行動したくなるような信号を徐々に筆者に送ってく

るようになってくる。そして地域と一緒に出たとき、地域社会と向き合い、懸命に社会や人のために尽力する大人に出会ったとき、大学生は感動する。その大人の本気度が、大学生の心を振せ、共感して新たな一步を踏み出す勇気に繋がっていく。同時に、大学生同士でも化学反応を起こして、互いに好奇心やチャレンジ精神を進化させていく。こんな大学生の姿を、筆者は何度も見た。だから、大学生の原動力には、「ホンモノとの出会い」ともいえる大人の本気度が、非常に重要であると考ええる。

つまり、大学生と大学教員だけの力量では、このにじいろCは実現できない。本気で向き合う大人との出会いが数多くあることで、大学生の創造力が育ち、大学生の言動までも変える。にじいろCにかかわる大人の本気度は、「コラボする皆さんの声」からすでに明らかであるだろう。本気で外国人青少年にも大学生にも向き合う大人たちだから、にじいろCでの最後で涙を流すのは、外国人青少年よりも大学生よりも、多くなるのかもしれない。

以上から、学齢を超過した外国人青少年に対するキャリア教育の在り方として、大学生と本気で向き合う大人たちとの協働による大学生とのワークキャンプ有用性が高いことが、5年間にわたる本実践から明らかになったことである。だが、何をもって大人の「本気」とするのかをはじめ、有効的な事前学習やワークキャンプのプログラムの内容などは明らかになっていない。また、にじいろCに参加した外国人青少年や大学生の成長の検証も必要であるだろう。これらは残された課題として、地域で外国人青少年を支える団体や地域課題に取り組む大学生と向かい合いながら、今後も続けて取り組んでいきたい。

注

1) 共同通信社および毎日新聞の調査と取材では、各自治体で学校に通っているか確認できない就学不明から、共同通信社は「義務教育年齢で住民票がある全国の外国籍の子ども約10万人のうち約1万人に関し、自治体が就学の有無を調査していない」（『西日本新聞』2016年2月21日朝刊一面）、毎日新聞社は「日本に住民登録し、小中学校の就学年齢にある外国籍の子ども少なくとも約2割にあたる約16,000人が、学校に通っているか確認できない」（『毎日新聞』2019年1月7日朝刊一面）と報道した。

2) 文部科学省は「主体的・対話的で深い学び」を次のように説明する（文部科学省2017）。

主体的な学びとは、「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連づけながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる」こと、対話的な学びとは、「子ども同士の協働、教員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自らの考えを広げ深める」こと、深い学びとは、「各教科等で習得した知識や考え方を活用した、『見方・考え方』を働かせて、学習対象と深く関わり、問題を発見・解決したり、自己の考えを形成したり、思いを元に構想・創造したりする」こと

3) これまでに中日新聞の発言欄に掲載された投稿は計15人分であった。その題目（掲載年月日）を以下に記す。

「折り鶴で言葉の壁破る」(14.10.20)、「メキシコの体験で成長」(14.10.25)、「言葉の壁、想像より高い」(15.11.10)、「個性をつぶさぬ教師に」(15.11.12)「知ることから始めよう」「個性を大切にす教師に」(16.10.24)、「外国人に笑顔で接して」「子と向き合う教師目標」(16.10.25)、「外国人児童、想像力豊か」(17.10.26)、「外国人児童、応援したい」(17.10.28)、「日本目指す子に優しく」(17.12.7)、「人と向き合う姿勢大切」(17.11.1)、「キャンプで異文化学ぶ」(17.12.12)、「スリランカ学んだ誇り」(18.11.26)、「『ないもの数える』は愚」(18.12.1)

4)大学生の活動は、「外国人児童とキャンプへ」(中日新聞14年11月22日)、「学生ボランティア最前線・外国人児童を支援するにじいろ☆キャンプ—子どもたちを支えていくスキルを学ぶ体験学習」(日本財団学生ボランティアセンターEMAC.15年2月・第7号)、「外国ルーツの子どもたちと『にじいろ☆キャンプ』—愛知淑徳大学小島ゼミのフィールドワークに密着!!」(多文化情報誌DiVEmagazine.16年12月・第2号)、「『にじいろ☆キャンプレポート』レポート」(NICE PRESS.19年2月・冬号)でも紹介された。

謝辞

本実践にあたり、NPO法人トルシーダの伊東浄江氏および湯原由美氏、NPO法人可児市国際交流協会の各務眞弓氏、山田久子氏、菰田さよ氏、NPO法人シェイクハンズの本里美氏、NPO法人NICEの浅井杏里氏、山ノ井優美香氏、岡田守弘氏、公益財団法人日本財団学生ボランティアセンターの豊永はるか氏および佐藤希美氏、トヨタ白川郷自然学校・プログラム研究所の佐藤翔太郎氏および黒坂真氏、同自然学校ゲストサービス部の水船梓氏、近畿大学准教授の西尾雄志氏(Gakuvo前代表)、認定NPO法人日本NPOセンターの上田英司氏(NICE前事務局長)からは、多大なるご協力とご指導をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 小島祥美(2011)「学齢を超過した義務教育未修了の外国人住民の学習権保障」『ボランティア学研究』国際ボランティア学会第11号 pp21-33.
- 小島祥美(2016)『外国人の就学と不就学—社会で「見えない」子どもたち』大阪大学出版会.
- 小島祥美(2019)『学齢を超過した外国人青少年の現状から公立夜間中学の必要性を考えるシンポジウム報告書』科研費・基盤研究(C)「学齢を超過した定住外国人の子どもに対するキャリア教育の在り方」.
- 出見世信之(2018)「アクティブラーニングとは何か」『明治大学商学部グローバル人材育成シリーズ②これがアクティブラーニング』同文館出版.
- 日本弁護士連合会(2006)『学齢期に修学することができなかった人々の教育を受ける権利の保障に関する意見書』.
- 松崎運之助(1979)『夜間中学—その歴史と現在』白石書店.
- 文部科学省(2017)『新しい学習指導要領の考え方—中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ』平成29年度小・中学校新教育課程説明会(中央説明会)における説明資料.